

【研究ノート】

寿永二年七月二十五日以降の平氏の シーパワーとしての戦略展開

海上 知 明

目 次

はじめに

1. 寿永二年七月二十五日
2. 海洋における拠点作り
3. 海軍戦略の展開
4. 海軍戦略の破綻
5. 戦略的勝利から戦術的勝利へ

おわりに

はじめに

当論文では、平氏政権のシーパワーとしての性格と、そこから生まれてくる戦略、「都落ち」段階の軍事面でのリーダーすなわち平知盛によって展開された瀬戸内海の家軍戦略を明らかにする。

現在のところ戦略、特にマハンに代表される海軍戦略論で瀬戸内海における平氏の戦役を分析したものない。元防衛大教授・金子常規氏は源平の争乱を戦術面から分析しているが戦略的視点は入っていない¹⁾。水軍史研究家の佐藤和夫氏は平氏の制海権にふれているが、それを積極的に海軍戦略と結びつけていない²⁾。本論文は瀬戸内海の平氏の興亡を海軍戦略で分析した試みであり、戦略研究学会の平成十八年度年次大会で発表した内容をシーパワーからの側面から論じたものである。

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

平清盛死後の平氏の政策は五段階に分かれている。近畿の兵力をもって東国を制圧できると考えていた段階、これが「俱利伽羅峠合戦」で近畿の兵力のあらかたを失うことになり挫折する。その後若干の紆余曲折を経ながらも都落ちを敢行し太宰府につく段階までは政治的正統性による対抗を考え立てていたふしが多分にみられている。すなわち平安京の朝廷に対し、安徳天皇と三種の神器を奉じた「遠の朝廷」構想である。これが九州内陸での勢力扶植失敗により挫折し、長門到着以後は戦略的対応の段階に入る。初期の方針は海峡封鎖力を確保することにより瀬戸内海に圧倒的な制海権を確立し、その制海権のもとで陸上に影響力を拡大していくことを試み、制海権の拡大に比例して陸上も傘下に納め、そのまま東進して上洛する予定であった。これが切り替わるのが一ノ谷合戦である。

一ノ谷合戦後は戦略的内線位置にある屋島を利用して敵の長大な補給路に対する奇襲を繰り返し、敵を衰弱させた後に壊滅させるという別種の海軍戦略へと切り替わる。さらにこの海軍戦略段階でも厳密には政策が二つに区分される。初期においては四国・九州を聖域として屋島から山陽への海上からの攻撃により源氏勢力を衰退させていたのだが、源範頼率いる源氏軍が誘い込まれるように西国に入ってくると、ひたすら内懷深くへと入り込ませた上で補給を遮断して瓦解させようとした。しかし、この海軍戦略が「屋島合戦」により崩壊し、その後、「戦略」的勝利から「戦術」的勝利の追求へと変化するのである。

シーパワーとしての平氏の特質は既に海賊退治を行った平忠盛の時代にも見られており、「音戸ノ瀬戸」を掘削した平清盛によって全面開花するのであるが、本論文では都落ちから「壇ノ浦合戦」に至るまでを中心に論証している。なお論証と言っても単に史実を拾い集める形はとっていない。当時の史料の少なさより、本論文においては社会科学的分析における演繹法の比重が高くなっていることをあらかじめ記しておきたい。なぜなら史料の中心は物語、東国からの記録、貴族の日記というものであって、もっとも史料価値の高いはずの貴族の日記類ですらも西国の状況については風聞を中心としている。しかも入手できるものとして平氏側から書かれた史料が皆無であるからである。

一般的に史料として高く評価されているのは『吾妻鑑』（前半部の編纂が文永二年（1265年）～同十年（1273年）とされている）であるが、実際の平氏の滅亡から八十年近くたってからまとめられたもので、その間に各種軍記物語が成立しているため、むしろ先に世に出た軍記物語の記述を利用している部分が多いように見える。そのため西海における平氏の盛衰についても軍記物語を参考にしている部分もあると推定できる。従って、文学として歴史家から軽んじられがちな『平家物語』を本論文では分析材料の中心に据えている。『平家物語』成立年代は諸説があるが、最初に登場した三巻物は建久元年（1190年）頃に成立したという説があり、遅くとも建暦三年（1213年）頃には成立したようであるから同時代性という点で他に抜きんでおり、文学的脚色を取り払い演繹の手法を使えば活用可能と考えている。なお、「海峡支配力」が本論文の主軸として利用するマハン戦略論であるが、そののみにとらわれず、マハンの理論の各種側面を具体的事象に照らし合わせ、その都度引用して検証する形としている。

1. 寿永二年七月二十五日

「昨日は東関の麓にくつばみをならべて十万余騎、今日は西海の浪にともづなをといて七千余人、雲海沈々として、青天既に暮れなんとす。孤島に夕霧隔て、月海上に浮べり、極浦の浪を分け、塩に引かれて行船は、半天の雲さかのぼる。日数歴れば、都は既に山川程を隔て、雲井の余所にぞ成る。遙々来ぬと思ふにも、唯尽ぬ者は涙なり。浪の上に白き鳥のむれいるを見給ひては、彼ならん、在原のなにかしの隅田川にて言問ひけん、名もむつまじき都鳥にやと哀也。寿永二年七月二十五日に、平家都を落果ぬ」³⁾。

『平家物語』描くところの「平家都落ち」の場面である。平安京を追われた平氏は落人として追捕されて運命をすぐに終える感覚にとらわれる。ところが都落ち後二年間近く平氏は西海の一大勢力として存在し、一時は平安京奪還の動きまでみせる。平氏だけではない、後に足利尊氏も平安京を捨てて九州まで

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

落ちのびることによって復活している。戦国の世にあつて織田信長上洛の報に接し、平安京の支配者であつた三好氏は阿波に逃れていく。当時の三好氏の勢力はさして強力ではなかったがそれでも四国における勢力を維持し信長に抵抗し続けることが可能であつた。逆に平安京防衛を図つた勢力、例えば「承久の変」での後鳥羽上皇は瀬田の戦いに破れてあつてなく敗退している。うまく平安京を防衛した例としては足利尊氏の上洛軍を撃破した後醍醐天皇軍があげられるが、これは尊氏のさらに背後から登場した北畠顕家の奥羽の軍の存在があつたからである。

こうした現象には都市としての平安京の性格が深く関わっている。平安京は政治的な都市であつた⁴⁾。たとえば「平家都落ち」より前、治承四年（1180年）の福原遷都が行われると平安京はまたたくまに荒廃しだす⁵⁾。同様の現象は、平安遷都後の平城京、幕府滅亡後の鎌倉、奥州藤原氏滅亡後の平泉などにも見られており、これらの都市は政権の移動とともにまたたくまに田舎に戻つてしまっている。逆の例としては豊臣家滅亡後にも繁栄した大阪があげられる。

政治的都市という平安京の性格から見ないと解説が不可能な事態が義仲上洛後に起こってくる。叡山の僧兵を従えて五万人⁶⁾の軍勢を引き連れて平安京に入った勝利者である木曾義仲が兵力を枯渇させていくのである。木曾軍上洛は寿永二年七月二十五日、しかし十月一日に行われた「水島」合戦の時の木曾軍は五千人⁷⁾～七千騎⁸⁾、その他に十一月に十郎行家が率いていたのが五百騎⁹⁾～千騎¹⁰⁾、さらに十一月十九日の「法住寺」合戦では義仲そのものが率いているのがわずか千騎¹¹⁾～七千騎¹²⁾、その二ヶ月後の一月十九日に十郎行家を追討するために差し向けた軍勢は五百騎¹³⁾と万を越える兵力の記述が少なくなり¹⁴⁾逐次減少していることが推測できる。そして六万騎と書かれている鎌倉軍を迎え撃つ時にはわずか九百騎¹⁵⁾～千六百騎¹⁶⁾が手持ちの兵となっている。

上洛から義仲敗死に至る間、「水島」合戦を除けば平氏との大規模な戦闘は起きていない¹⁷⁾。つまり戦闘による兵力消耗は比較的少ない。『平家物語』では「法住寺」合戦前に五畿内と信濃源氏の兵が後白河法皇に寝返つた¹⁸⁾以外では、「北国の勢とも皆落ち下つて」¹⁹⁾とある。そして平安京における木曾軍

の記述としては悪名高き乱暴狼藉の数々が登場している。平安京には、都市として機能上も性格上も大軍を駐屯させておくことはできなかったのである。その食糧枯渇が略奪行為につながっていた。そして食糧枯渇のために兵達は北陸へと引き返す。

平氏が平安京を明け渡したのは、一つには「戦わずして木曾義仲軍を枯渇させる」ためであった。平氏はまず平安京を捨てるという戦略的撤退で成功の第一歩を踏み出すのである。同時に、これは軍隊の建て直し策としても優れた方法であった。キャサリン・コーリーは軍隊を溶解させる有力なものに敗戦があると述べ²⁰⁾、又、叛乱が起きている中心部に軍隊を置けば寝返る危険があると述べている²¹⁾。これは軍隊が自信を喪失した段階においては逃亡と裏切りが続出して自然崩壊する可能性があることを示唆するものである。政治的都市平安京に留まることは、まさに平氏「軍」崩壊の危機に直面するとも言える事態となる。これを避けたのである。

もともと西国への都落ちの発想は平清盛によるものであった。「平治の乱」に際して、少数の供回りのみを連れた熊野で乱勃発の報を受けた清盛は紀州の浦から舟で西国に向かい、四国・九州の兵を集めることを考えている²²⁾。さらに兵乱に際して天皇・法皇を具して西海に向かうことは度々口外されていたようであった²³⁾。

2. 海洋における拠点作り

当初、都落ち後の平氏が太宰府をめざしたのは戦略的な行動というよりも政治的な意図に基づいての行動であった。すなわち平安京に残った後白河法皇ら東の朝廷に対する、西の朝廷「遠の朝廷」の主張である²⁴⁾。「三種の神器」と安徳天皇を有している以上、朝廷としての正統性はむしろ平氏側にある。しかし緒方氏らの叛乱²⁵⁾にあい太宰府より撤退し²⁶⁾、この計画は挫折する。

この段階から平氏の指揮権は平知盛に委ねられたと言える。太宰府への「遷都」は平安京で官位に就いていた感覚の延長上の行為と言えたが、知盛の知行

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

国である長門への移動後の行動は戦略に基づいた拠点作りになっていくからである。「一定面積内における一等戦略地点の数は海上に於ては陸上よりも少し。蓋し如此は其の区域内における戦略地点の価値を高からしむる所以なり」²⁷⁾と海軍戦略家アルフレッド・セイヤ・マハンは指摘する。

さらに長門の目代である紀民部大輔光季（通資）により大船百三十隻の舟が献上される²⁸⁾。平氏は海軍戦略上、欠くことができない兵船を多数備えることになる。そして讃岐、屋島に拠点を構えるのである²⁹⁾。

瀬戸内海は西国の中央位置であり、屋島は瀬戸内海の中央位置である。屋島は山陽道全体を覆う「内線の利」を占めている。海軍基地屋島には四国だけでなく山陽よりも軍船が駆けつけ海軍戦略上の一大拠点と化した³⁰⁾。屋島の守護は特に塩飽水軍が受け持ったが、後に水島合戦での主力を担ったのも塩飽水軍であった。さらに知盛は備中国水島にも海軍拠点を築き上げる³¹⁾。

この二つの拠点間には幾多の小嶋が点在していたが、二つの拠点を結んでラインを形成すると、その間は無数の小嶋があるから通行の監視がしやすい上、迎撃も楽である。屋島の前衛となったのが塩飽と児島でここは平行盛が守ることとなっていた。通行する敵艦隊は即時発見され、小嶋の影より登場する平氏海軍によって迎撃されるのだが、海軍基地から近距離の迎撃であるだけに平氏海軍は準備万端であった。つまりアントワヌ・アンリ・ジョミニが述べる「攻勢防御」体制である。

屋島に着く以前からも平氏の行動には戦略的な側面が見え隠れする。『玉葉』によれば平氏は既に都落ち後一ヶ月にも満たない八月十二日、備前国児島に兵船百余隻を集結していたという³²⁾。備前国児島は海軍戦略上の拠点である。太宰府到着は八月十二日であるから³³⁾、それ以前にも平氏の兵船は百隻近かったことになる。平氏が都落ち段階で多数の兵船を保有していたことは当初から大きな力になっていたようである。陸軍戦略と海軍戦略との差異についてマハンはこう述べる。「海軍戦略は、戦争と同様平時においても必要であるという点において陸軍戦略とは異なっている」³⁴⁾。従って「海軍戦略は、戦時におけるのと同様平時においても、国のシーパワーを建設し、支援し、増大することを

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

その目的とする」³⁵⁾。なぜなら海軍力は商業貿易と結びつき、その護衛のために普段から海軍基地を設けているからであるという。平氏は日宋貿易を行っていた。

毛沢東は広大な地区における遊撃戦展開のために根拠地の必要性を力説した。「遊撃戦争における根拠地とはなにか。それは、遊撃戦争がそれによって自己の戦略的任務を遂行し、自己を保存し、発展させ、敵を消滅し、駆逐するという目的を達成するための戦略的基地である。かかる戦略的基地がなければ、すべての戦略的任務の遂行および戦争目的の実現も、そのよりどころもなくなってしまう」³⁶⁾。知盛が行ったのは瀬戸内海全体を遊撃戦区にするための海上での拠点作りである。従って、建設された拠点はマハンが指摘するような海峡支配力を有する場所になってくる。

「現在若は将来の戦場を考察するにあたり第一に着眼すべきは、如何なる地点若は数地点の連鎖が、其の天然及固有の利点に依り、戦域戦場の大部分に及ぼし居れるやを制定する事なり」³⁷⁾ とはマハンの言葉であるが、平氏が一定の海軍戦略拠点作りのために活動していたことは、断片的ながら軍記物や日記類からも伺うことができる。一見無計画に見えながらも、『平家物語』『源平盛衰記』『玉葉』『吾妻鏡』などに登場する平氏の出没先は、須磨の関³⁸⁾、明石³⁹⁾、淡路島⁴⁰⁾、播磨国室泊⁴¹⁾、備前国水島⁴²⁾、備前国児島⁴³⁾、備後国簗島⁴⁴⁾、讃岐国屋島⁴⁵⁾、関門海峡⁴⁶⁾と彦島⁴⁷⁾と皆交通の要所になっている。「一般に海上に於てもまた陸上に於ても、重要な戦略地点は、公道の通過する箇所、殊に其の交差点又は分歧点、就中平行なる其の数條が、障碍物が存在する為に相寄り寄りて一個の隘路—例えば橋梁の如き—を通過する点に存在する」⁴⁸⁾。特に屋島と彦島は「平家は屋島を以て城郭とし、彦島を以軍の陣とす」⁴⁹⁾とあるように海軍戦略上の永久地点⁵⁰⁾であった。

これらの拠点を戦略的価値の主要条件で見れば、瀬戸内海上の海軍基地は相対的位置と軍事的強度はあわせもつが兵資は小さなものが多い。そうした小島の海軍基地は四国と九州を兵資の源としている。淡路島はある程度の兵資を持っているが、山陽道上の基地は軍事的強度は弱いということになるだろう。そ

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

れは陸からの脅威によるものである。「海岸要塞は、海上よりする攻撃よりも、陸上よりする攻撃に依りて攻略される危険」⁵¹⁾が多いからである。

都落ち後二ヶ月たらずで瀬戸内海に勢力を回復した平氏と戦うために木曾義仲軍が備中国水島に到着し、十月一日に海戦が起こる。平氏軍は千隻⁵²⁾の舟の船尾と船首を綱でつないで安定させ、強い西風によって安定をかいだ木曾義仲軍に矢をいかけて完勝している⁵³⁾。さらに播磨国室山で源行家軍を撃破する⁵⁴⁾。ほぼ平氏は敗戦ショックから立ち直り、軍事的にも瀬戸内海沿岸における優勢を確保した⁵⁵⁾。「墨俣合戦」と同様に両会戦とも包囲形態がとられており、平氏軍の戦術上の特徴とみることができる。

平氏は海軍戦略上の拠点作りとともに瀬戸内海を中心にした豪族を集結させる。これには政治的正統性も力となったようである⁵⁶⁾。さらに平氏に対して反旗を翻す勢力の討伐も積極的に行った。『平家物語』では「六ヶ度合戦」⁵⁷⁾、『源平盛衰記』では「能登守所々高名事」⁵⁸⁾として書かれている。追討されたのは淡路の加茂義嗣、義久、伊予の河野氏、安芸の沼田氏、淡路の安魔忠景、紀伊の園部忠康らであった⁵⁹⁾。これらの豪族の拠点はすべて海軍戦略上の要所であったため、追討は単に反乱者を恭順させるという軍の統率や政治的正統性の意味からだけでなく、海軍戦略上の拠点確保からも重要なものであった。従って「六ヶ度合戦」「能登守所々高名事」は平氏が海軍戦略上の拠点をいかに拡大したかの数少ない具体例ともとれる。これにより海峡支配力が強力に確立されたとみてよからう。

この段階での平氏の最大の失策は講和を示唆してきた木曾義仲と和平を結ばなかったことである⁶⁰⁾。「可能的作戦」の視点で言えば、木曾義仲と和平すれば戦わずして平安京に入り、木曾義仲の勢力圏を併合し、木曾義仲の野戦能力を利用して東国を制圧できた。少なくとも木曾義仲に兵を貸し与えて関東源氏と戦わしめ「漁夫の利」を得ることも可能であったが千載一遇の機会をイデオログの発言によって逸してしまっている。ここにコーベットなどに見られる政戦一致の海軍戦略ではなく、軍事的戦略のみに頼る平知盛の限界が見られている。つまり「政治の延長」ではなく、ルーデンドルフにみられたような軍事

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

に他のすべてが従属する形態がとられているのである。

3. 海軍戦略の展開

一ノ谷に集結していた平氏軍は大阪湾までも制海権におさめていたから海軍による打倒は困難であった。『玉葉』によれば「源納言示し送りて云く、平氏主上を具し奉り福原に着きをはんぬ。九国未だ付かず。四国・紀伊の国等の勢数万と。来十三日一定入洛すべしと。官軍等手を分かつの間、一方僅かに一千騎に過ぎず」⁶¹⁾とある。

清盛の命日は二月四日であるが、このころに後白河の命により修理権大夫（坊門親信）が書状を送り、和平の準備をしているゆえ二月八日まで武装解除して一切の戦闘を中止して勅使の到着を待てと申し渡したという⁶²⁾。しかし同時に寿永三年正月二十六日平家討伐の院宣をくだしている。この八日の和平を信じ切って武装解除された平氏に対し、源氏軍は五日の夜に三草に陣取る平資盛、有盛らに奇襲をかけて破り、さらに六日の明け方、一ノ谷に奇襲をかける。策謀の下敷きがあったため、義経の奇襲は単なる奇襲に留まらず、心理的な効果から「間接的アプローチ」⁶³⁾となった。

多くの人から絶賛されている「鴨越え」であるが、高い評価は結果論からくるものであり、地形や兵力配置からの厳密な検証はなされていない。「迂回して背後からの奇襲」という方法は特筆すべきレベルではなく、ありきたりの方法である。むしろ、それは失敗した例の方が多い。成功の要因は後白河法皇からの和平使者を派遣するという政略に由来するものであり、まさに「合戦は謀多きが勝ち」の例証としてみるべきであろう。

狹隘地にいる平氏軍は逃げ場を失って海上へと離脱したという記述になっている。しかし一ノ谷の地形を見れば前面に海が展開し、平氏軍には海軍があった。奇襲を敢行して一ノ谷という狹隘地に入り込んだ源氏軍は、一転して海上に展開した平氏軍の逆襲にあい「袋の鼠」状態で包囲、殲滅させられる形になる。合戦は卯の時に開始され巳の時に終了したとある⁶⁴⁾。本来はその後大規

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

模な逆襲に転じ源氏軍は全滅するはずであった。それが平氏軍の一方的な逃走になったのは「間接的アプローチ」の本質を示している。心理的な混乱は、平氏に冷静な判断を失わせ、それがゆえに海軍を利用して包囲する「絶好の機会」を認識せしめなかった。これはクラウゼヴィッツの言う奇襲の効果にも等しい。

クラウゼヴィッツは戦史における「可能的戦闘」⁶⁵⁾の研究を述べている。平氏軍側からの「可能的戦闘」が海上からの包囲作戦であるとする、源氏軍側からの「可能的戦闘」は、『三国志』に登場する「赤壁の戦い」⁶⁶⁾に近いものになるであろう。平氏軍の海軍が集結しているという事実、源氏側がほとんど考慮していないことは驚嘆に値する⁶⁷⁾。停泊中の船舶への奇襲「火攻め」は海軍の名提督の常套手段である。一ノ谷に集結していた平氏海軍が焼き払われれば、平氏との抗争がこの後一年近くも続くことはなかった。源氏軍勝利は大きく喧伝されたが平氏海軍にとっては致命傷ではなく、すぐに復活している⁶⁸⁾。

平氏は屋島に移動した。『玉葉』の二月十九日の記述に「伝聞、平氏讃岐八島に帰住す」⁶⁹⁾とある。海陸両用の一ノ谷に対し、屋島は完全な海軍基地である。

「一ノ谷合戦」後、平氏は完全な海軍利用による戦略に転ずる。例えば戦闘方式も「児島合戦」前後には平氏の戦い方として「兵船は百余艘を以て毎度に襲来、船中には大楯を組みて其身を顕さず、陸地より馳向時は、矢間を開きて馬の腹を射、乗人馬より落時は、歩兵の輩数百人、舟より下降て打取」⁷⁰⁾との記述がある。この段階に至っては騎馬を舟に乗せて出撃する形はとられておらず、完全に歩兵のみとなっていることがわかる。軍隊の形態は戦争目的により決定するが、同時に戦略の変化も軍隊の形態変化をもたらすと言えよう。瀬戸内海の手海軍基地の数も制限されているようであるが、これも戦略の変化に対応したものであり、以下のマハンの指摘により新戦略が推測できる。「其の成るべく大部分を管制するに便なる数地点を保有するを有利とす」⁷¹⁾。

陸上兵力が大規模に入り込まない段階と「一ノ谷」後では山陽道に対する態度も変化している。「一ノ谷合戦」までは、山陽道に対して「政治的正統性」

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

と「拠点からの影響力行使」を併用して勢力拡大につとめていた。こうして平安京に向かって拡大していったのであるが、「一ノ谷合戦」後は陸上兵力が入り込む地方に対しては、海軍による源氏勢力への広範囲な攻撃に切り替わった。すなわち平氏の策源たる九州と四国は海で遮断された「聖域」として維持し、山陽道には海上から攻勢をかけていく。九州と四国の武士達は平氏与力が多く院宣の効果も薄いから政治的にも維持しやすい⁷²⁾。山陽道へは平氏自らが「勢力扶植」につとめるよりも、山陽道を支配しようとする源氏に対して間断なく攻撃して疲弊させようという消耗戦略を基本とする。毛沢東ならば海上の遊撃戦と呼ぶかもしれない。海軍をもたない源氏軍は海上からの攻撃には手のくたしようもない。これを可能にしているのが「制海権」の確保であり、それは「海峡封鎖力」によって保証されたものである。事実、「屋島合戦」に至るまでは源氏海軍が瀬戸内海に登場することはなかった。しかも平氏軍は伊勢⁷³⁾、伊賀⁷⁴⁾にまで影響力を及ぼし平安京にいる源氏軍の背後を脅かしている。

屋島は山陽道に対して内線の位置にあり、安芸から播磨に至るどの地点に対しても攻撃点を設定することが可能であった。平氏の立場では防御は制海権によって保証されながら攻撃は集中できるという利点があった。瀬戸内海の公開の安全性を考えれば平氏の「前進作戦正面」⁷⁵⁾は山陽道全体から大阪湾にまで及んでいたと考えられるが、平氏の戦略が内線的攻撃が中心なのか前進作戦正面が中心なのかは限られた史料からでは判断できない部分がある。源氏も自らの不利は悟っている⁷⁶⁾。「一ノ谷合戦」後に備前と備中と備後守護を土肥実平、播磨と美作守護を梶原景時が命じられるが、実行支配はない。「一ノ谷合戦」での平氏軍の打撃は壊滅的であるのにほど遠い限定的なもので、六月以降は平氏の攻勢が広範囲に開始されている。

『玉葉』の六月十六日の記述によれば、平氏は海軍によって備後を攻撃し土肥実平を撃ち破り、救援のために播磨から梶原景時が援軍に駆けつけると、今度は空になった播磨へ移動、播磨国室泊を奇襲して焼き払うという海上機動力を生かした活躍がみられている⁷⁷⁾。「配備適切なる艦隊は、陸上の何ものも企及し得ざる速度を以て所要の戦略地点に移動し得るものなり」とはマハンの指

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

摘である⁷⁸⁾。六月十七日には摂津国福原に平氏軍の姿が見えている⁷⁹⁾。陸上兵力の移動は山陽道では制限され海軍の動きについていけなかった。六月二十三日の記述では「平氏の勢いはなほだ強し、源氏武士など気色損じ了ぬ」⁸⁰⁾とある。さらに八月一日の記述で「鎮西多く平氏に与し了ぬ、安芸国は官軍に与みす、六ヶ度合戦、毎度平氏理を得ると云々」⁸¹⁾とあり、九州が平家勢力圏であり⁸²⁾、安芸は源氏方であるが合戦は平家が勝利し続けていることが書かれている。安芸における平氏の海軍基地は大島である。源氏側からの記述でも「一ノ谷合戦」後に「西海に至りて、彼の国々を掠奪す、しかるにこれを攻め襲われんが為、軍兵を發遣せられ」⁸³⁾とある。頼朝は弟の範頼を大将にして西国制圧のための遠征軍を派遣することにする。

源範頼は八月八日、千騎を率いて鎌倉を出発し⁸⁴⁾、九月一日、頼朝の指示により西国に向かう。関東だけでなく東海から近畿へと寡兵しながらの西進なのでかなりの大軍が西へ向かうという記述が軍記物語に掲載されている。『源平盛衰記』によれば総勢十万騎舟千艘とある⁸⁵⁾。制海権も、補給線の概念すら希薄なまま源氏軍は山陽道を前進する。知盛はここで戦略を変更する。優れた戦略家の常として知盛は山陽道への大規模攻撃の連続により本格的な源氏軍を瀬戸内海に誘い込もうとしたのかもしれないし、誘い込めないならば再び山陽道を傘下におさめるという複合的な目標を持っていたのかもしれない。

大きく海に面した上、狭い山陽の平野は平氏海軍にその脆弱な下腹部をさらしていた。大軍の進行が可能なのは瀬戸内海に面した狭い平野部分に限られる。長大な補給線はその平野上に形成されていたため平氏軍に攻撃目標を提供した。地政学的に山陽道を考察すれば、源氏軍を西国の内懐深くさそいこみ、伸びきった補給線を寸断するというのは妥当な戦略である。そこで平氏軍にとって防衛可能な安芸、周防、長門も放棄するように偽装した。本来、中央位置・屋島を領有する平氏軍は山陽道全体を作戰正面とすることが可能である。源氏軍が大軍であることは野戦や城攻めには有利に働いたが、その分兵糧が膨大なものになり、九州に至るまで長大な補給線と数多くの兵站を維持するという負担を背負わせることになった⁸⁶⁾。後方の兵站基地は山陽道沿いに分散され、兵

力も分散されるため、前線の兵力は補給線に反比例して減少する。源氏軍の作戦線は長門から摂津に至る。「敵側がすでに戦闘を開始しているのに、未だ麾下の兵力を無意味に行進させているような、換言すればこの兵力をいわば死なしておくような将士は、彼の兵力を不経済に使用するものと言わなければならない」⁸⁷⁾とはクラウゼヴィッツの指摘である。十月半ばに範頼は安芸にいた⁸⁸⁾。『玉葉』の十月十三日では「伝え聞く、教盛卿等の為に、長門に在るの源氏、葦藪く追ひ落され了ぬと云々、又、平氏五、六百艘、淡路に着すと云々」⁸⁹⁾とあり、平家軍の作戦地帯は瀬戸内海全域に及んでいることがわかる。

陸軍のみをもって山陽道を攻略することは軍事的には可能であるが、政治支配の段階に至らなければ陸軍だけの支配維持は困難である。根拠地からの長大な線と点との支配に兵力は分散されてしまう。しかし瀬戸内海にある海軍は分散させる必要もなく集中使用が可能である。海軍は陸軍基地へ集中された兵力で攻撃をかけられるが、陸軍は瀬戸内海上に位置する海軍基地には攻撃不可能である。もちろん陸軍も集中使用することにより一度奪われた山陽道上の根拠地を奪還することは可能であるが、海軍が次の目標に攻撃を転換したならば、現在維持している拠点を維持しつづけるか、それとも放棄して次の地点に移動するかを選択をせまられる。移動速度も海軍に比すれば迅速とは言えない。

平氏軍による瀬戸内海の海上遮断線の最大のものは屋島とその対岸の備前児島にひかれたラインであり、ここは前進位置ともなっていた⁹⁰⁾。備前は源氏の勢力圏であったが十二月に知盛は砦を築く。源氏軍の補給線遮断だけでなく退路を断つ意味も兼ねた砦に、十二月十八日に平行盛を大将にした兵舟二千艘が到着する⁹¹⁾。ここで源氏軍との戦いが起こるが当初は制海権を持たない源氏軍は平家軍に圧倒される⁹²⁾。しかし騎馬武者の進撃できる浅瀬が発見されたことから激戦となり平家軍は屋島に退いたとある⁹³⁾。平野での正面会戦となった時の騎馬武者の勇猛さもさることながら知盛が戦略を大きく転換したことが撤退の背景にある。山陽道の拠点は陸軍兵力が侵入して来たときには放棄し、逆に占拠させた方が敵に負担をしいることになるからである。源氏軍にとっては淡路島も児島も「多数の港を保有する結果、若し兵力分散の誘惑を感じずるが如き

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

事あらば、それ等の港は、単に無用なるのみならず寧ろ有害と謂うふべし」⁹⁴⁾となっていた。源氏軍は児島を保持しようとするれば戦力がさらに分散し、放棄すれば平氏軍によって奪還され補給を遮断されるというジレンマに陥る⁹⁵⁾。クラウゼヴィッツが指摘するように「戦略は、ある地点において生じた不利を、他の地点で得たところの有利によってのみ償うことができる」⁹⁶⁾のである。

範頼はついに長門にまで引き込まれた。知盛の新しい戦略方針は源氏軍を戦闘によって撃退するのではなく可能な限り補給線を引き延ばしての遮断であるから戦闘はあっても偽装的なもので、勝利させることにより前進を促したと言える。海上輸送はもとより平氏海軍によって遮断されている。そこで不利な陸上輸送を余儀なくされたのだが、陸上補給も間断ない海からの平氏の攻撃によって断ち切られた。敵の「根拠地と其の作戦目標とを連絡する交通線を絶えず管制したりしことは、敵をして戦略実施の余地を得ざらしめたり」⁹⁷⁾とマハンが指摘する。前進する距離の分だけ源氏軍の兵力は兵站防御のために分散され、分散されれば一ヶ所に駐屯する部隊は小規模になるから集中して攻めることが可能な平氏海軍にたやすく撃ち破られる。かといって大軍を一ヶ所に留めれば兵糧は枯渇する。

長く伸びきった補給線に対して間断なき攻撃をしかける「戦略」こそが、最終的に「海をもって陸を制する」ことを可能にする主要因と知盛は判断しているようであった。源氏軍の衰退は激しく「兵糧欠乏するの間、軍士等一揆せず、各々本国を恋ひ、過半は逃げ帰らんと欲す」⁹⁸⁾とある。補給線の遮断に加えて西国全体が飢饉であったために、かつて「富士川合戦」に向かった平氏軍と類似した状況に陥ったのである。

範頼は「周防国より赤間関に到り、平家を攻めんがために、その所より渡海せんと欲するところ、糧絶え舟無くして、不慮の逗留数日に及ぶ。東国の輩、すこぶる退屈の意ありて、多く本国を慕ふ」⁹⁹⁾、侍所別当で剛勇をもって鳴る和田義盛でさえも「なほひそかに鎌倉に帰参せんと疑す、いかにいはんやその外の族においてや」¹⁰⁰⁾といった状態に陥った。伊澤五郎は安芸に範頼は周防に後退することが提案されている¹⁰¹⁾。

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

しかし知盛の戦略では最終的に大規模な決戦にて勝敗を決するためにさらに衰弱させなければならない¹⁰²⁾。クラウゼヴィッツによる戦略の定義は「戦略は戦争計画を立案し、所定の目的に到着するための行動の系列をこの目標に結びつけるのである、則ち戦略は個々の戦役の計画を立て、またこれにの戦役において若干の戦闘を按排するのである」¹⁰³⁾とされている。「戦略は戦闘を規定する」¹⁰⁴⁾。そのためには九州にまで源氏軍を上陸させなければならない。源氏軍に本州を越えさせ、攻勢限界点を突破させなければならないからである。彦島という海軍基地と優勢な海軍戦力にも関わらず源氏軍の九州渡航を阻止しなかったのは、こうした配慮に基づくものであろう。源氏軍渡航の舟は九州の緒方氏が提供した八十二艘だったという¹⁰⁵⁾。従って軍勢の数自体も相当に減少していたことが推測できるし、またその程度の舟数では簡単に全滅させることができたろう¹⁰⁶⁾。

4. 海軍戦略の破綻

知盛が、海軍戦略という形で、広大な面として合戦全体を眺めていたのに対し、源氏の武者は、個人の武勇という最小の点で戦いをとらえていた。これが後に鎌倉武士の「掛け合い戦法」につながる発想である。仮に、戦術が必要だと悟ったとしても、そこから現れる戦術は、せいぜい点の積み重ね（応用ではない）でしかなかった。

知盛は優れた戦略案の常として複数の目標を持っていたはずである。源氏軍を衰弱させた上、最終的には戦術で一撃くらわすことにより一気に瓦解に持ち込もうと立案していた可能性は高いが、衰弱死の可能性も選択肢にはあった。『玉葉』『吾妻鑑』『平家物語』『源平盛衰記』のいずれの記録を見ても、範頼が九州に渡航した後、知盛は大規模な攻撃を加えていない。にもかかわらず平氏の力の巨大さと源氏の衰弱とが際立っていく。屋島合戦の直前まで「平氏強々」と『玉葉』では記されている¹⁰⁷⁾。瀬戸内海の中央位置である屋島は依然として山陽道全体に対する内線的な圧力を加えているが、基地そのものの性格とし

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

ては防御作戦根拠地¹⁰⁸⁾の色彩が強まっている。この段階においては屋島と彦島以外の海軍基地については「敵にしてさる者ならば、斯かる地点に対して時間と兵力とを浪費せざるべし」¹⁰⁹⁾という役割に変化している。

四国と北九州という、源氏軍の力、すなわち渡航能力のないランドパワーでは影響力の及ばない所に平氏は力の根源を置けた。これは大英帝国にとっての植民地に相当する。海に守られた策源に加えて平氏軍は数拠点に兵力を集中して、海上という陸軍では何の抵抗もできない安全地帯を通過して随時敵の拠点を攻撃することができた¹¹⁰⁾。これには屋島という海軍基地の存在が大きい。屋島は単に山陽道への攻撃に有利というだけではない。瀬戸内海における行動の自由と監視にも有利であったし、遮断線の起点ともなった。

源氏軍によりこの屋島への直接攻撃が制海権ももたないまま計画される。寿永四年（元暦二年、1185年）二月十六日、出撃命令を受けた義経は、梶原景時と激論のすえにわずか百五十騎を五隻の船に乗せて嵐の中、摂津国渡辺（現在の大阪市北区）出陣。海を渡り、四国に上陸、平氏が誇る要塞・屋島を背後から攻撃しようとした。三日かかる行程をわずか四時間で阿波勝浦（現在の小松島市）に漂着する。旗山（現在の芝生町）から先を作戰地帯とみなして軍勢を立て直し、地元新居見城主近藤六親家の兵を先導役に夜を徹して屋島に進み、平氏軍を急襲した。二月十九日辰の刻に屋島の内裏が焼かれる。

屋島の合戦は途中まで、というよりも平氏軍が撤退するまでの間、戦局は圧倒的に平氏軍が優勢であった。源氏の唯一の成果は内裏を焼き払ったことで、平氏海軍は無傷で存在している。本来焼き払うべきは内裏ではなく海軍そのもののはずである。しかも屋島は浅瀬とはいえ海に隔てられた島であるが、義経はその中に入り込んだ形となっている。周囲には平氏の海軍が包囲するように展開している。兵力比は大変な差である¹¹¹⁾。結局、一ノ谷合戦も屋島合戦も、義経は「袋の鼠」状態になっている。

二月二十一日には平氏軍による志度浦上陸が試みられている。平氏軍による志度浦上陸は、その規模、やり方とも「決戦態勢下での兵力の逐次投入」に近いものであったが、それでさえ小勢の義経軍は押されがちとなる¹¹²⁾。平氏軍

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

が思い切って全軍を投入して多方面から包囲すれば簡単に全滅させられたに違いない。しかし優勢な立場にありながらも「袋の鼠」義経を放置したままで平氏軍は不可解な撤退をする。『平家物語』の記述にある「扇のまと」を信じられるほどに撤退理由は見あたらなかった¹¹³⁾。

結果論的に言えば、たとえ梶原景時が率いる百五十隻の船が加わったとしても平氏海軍の優勢は揺るがなかったのであるから撤退すべきではなかった¹¹⁴⁾。屋島さえ維持すれば海軍戦略は十分に継続可能であったのである。たった一回の、過失とすら言えない不可解な「出来事」が、勝利を失わせたのみならず、戦術上では「敗戦」の烙印を押され、なによりも致命的なのは戦略全体の破綻を生み出したのである。戦略と相関関係にあった「制海権」も「位置の利点」もなくなってしまった。

依然として彦島は平氏軍の手にあったから本州と九州の遮断は続いていたが、それができなくなるのも時間の問題であった。屋島を失うことにより遮断線が消え源氏海軍が瀬戸内海に侵入することが可能になり、陸上に対する補給線攻撃もできなくなり、逆に源氏軍が瀬戸内海の中央位置を占めることとなったため制海権も失われた。平氏軍の不利は決定的になり四国の海軍までが源氏側につくことにより兵力も（船数的にだが）相対的に平氏軍が劣ることになる。九州の兵が源氏軍に加わったのも屋島合戦後である¹¹⁵⁾。

このために知盛は戦略的勝利の追求から戦術的勝利の追求へと変更を余儀なくされることになったのである。

5. 戦略的勝利から戦術的勝利へ

寿永四年（元暦二年，文治元年，1185年）三月二十四日，彦島にいた平知盛軍と屋島から逃れてきた平宗盛軍が合流した。彦島には知盛によって堅固な城が築かれたことが土井実平の飛脚文によって知られている。この彦島にあって指揮官たる知盛には三つの選択肢があった。一つは大陸にまで逃げることである。二つ目は屋島を奪還することである。三つ目が、「三種の神器」と安德

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

天皇を追って来る義経を迎撃することである。

過去二度の戦いにより、知盛は義経の戦い方を熟知していたため選択されたのは迎撃であった。潮流の早さと変化の激しさに定評がある壇ノ浦であるが、平氏軍はその変化にも熟知していたため『孫子』の言うところの「彼を知り、己を知れば（謀攻篇）」¹¹⁶⁾の状態であり、しかも先に戦場に到着するというところで「凡そ、先に戦地に処りて、敵を待つ者は佚し、後れて戦地に処りて、闘いに趨る者は勞す（虚実篇）」¹¹⁷⁾でもあったからである。平氏軍は豊後田ノ浦で待ち伏せすることとする。

「壇ノ浦合戦」はそれ以前の「一ノ谷合戦」「屋島合戦」とは性質を異にする戦いであった。平知盛にとって、海軍戦略は考慮されず、ただ戦術的勝利を目指す戦であった。この段階において戦略は不在となっており、戦術的勝利の後に戦略が復活することになっていたのであろう。従って、並び称される他の二つの合戦「一ノ谷」「屋島」とは背後に存在するものが異なっていたと言える。「壇ノ浦合戦」は戦術のみを志向したために彦島もまた囷として利用されることがなかった。このことについて知盛自身が語った言葉はなく、史料に明確に記述されているものはない。しかし、社会科学的に歴史を分析する時、既存史料の不備は演繹法によって補われることになるのは前述した通りである。

源氏軍は屋島を出立し、寿永四年（1185年、文治元年）三月二十一日に大島津に着く。海軍戦略の視点で言えば義経もまた屋島で一連の戦いに終止符を打てるはずであった。義経が万難排して行なうべきは屋島を放棄して戦線離脱した平氏海軍が彦島の部隊と合流することを阻止することであった。屋島離脱の平宗盛軍と彦島の平知盛軍が合流すれば平氏海軍は劣勢ではあっても無視できるほどの寡兵にもならない。彦島にいる海軍だけであるなら、いかに知盛が名将であっても絶対数の差をそう容易には挽回できない。

幅六百メートルの壇ノ浦に集結した双方の海軍は『平家物語』では平氏千隻・源氏三千隻とあり、中原信康の記録では平氏五百隻・源氏八百五十隻とある¹¹⁸⁾。

平氏軍の陣立ては『平家物語』によれば先陣は山鹿秀遠が五百隻、二陣は松

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

浦党が三百隻、三陣が平氏一門の二百隻であり知盛の指示により三陣に分けたことになっている。この点は『吾妻鏡』も同様で平氏軍は山鹿秀遠、松浦党を大將軍として三手に分けたとされている。平氏千隻、源氏三千隻というのは差がありすぎるが、源氏軍は海軍以外に陸上にも兵力を配置しており兵数的に圧倒的に優勢であったことには変わりなかった。

『平家物語』によれば海戦開始は卯刻すなわち午前六時開始とある¹¹⁹⁾。一方、『玉葉』によれば正午開始で午後四時終了となっている¹²⁰⁾。平氏軍の先鋒山鹿隊は弓の名手五百人を揃えて一斉射撃を行なったため源氏軍は機先を制された。もし午前六時開始ならばこの戦法は突進する源氏軍を射すくめる名案であった。源氏の出鼻をくじき、先鋒を切り崩しておいて潮流の逆転を待ったのだ。開始時間が正午だとすれば矢合戦をしつつ急速に包囲を展開したということであろう。いずれの形態であろうが確かなことは平氏が潮流にのって攻め、第一段階の最大の攻勢を正午前後としていたことである。

潮流に勢いによって平氏軍は包囲態勢を整える¹²¹⁾。潮流の変化と勝敗については諸説ある¹²²⁾。赤間関より東方約六キロの地点に満珠と干珠という二つの島がある。平氏軍は田ノ浦のそばをやや離れて流れる北水道に乗って源氏軍を満珠と干珠の二つの島へ圧迫していく。潮流はもう一つあり、田ノ浦のすぐ前面の潮流である南水道は東に流れつつも田ノ浦前で回転し沖とは逆の方向に緩やかに流れ門司関へ向かっていく。知盛はこの二つの潮流を利用し三方向から源氏軍を包囲しようと考えていた。これが一見奇異に見えるのは数の上で平氏海軍が既に劣勢になっていたから少数をもって大軍を包囲する形であることである。しかしハンニバルの「カンネ合戦」に代表されるように機動力を利用すれば少数による包囲の例もあった。潮流が騎馬に代わる機動力として利用されていた。ヨーロッパにおいては第一次英蘭戦争時のポートランド海戦で二人の名提督ルイテルとトロンプによってようやく認識されるようになった海戦での戦闘体型と戦術とが、既に知盛により実行されようとしていたとみるべきだろう。

しかも、この作戦は二段構えであった。潮流が変わった段階で源氏軍は単線

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

的に三種の神器と安德天皇に向かって直進し、その先頭にはかならず義経がたつことは過去の戦歴により明らかである。潮流は三時ころに変わるが、その段階で平氏は緩流地帯の渦巻地帯に退き源氏軍を迎えうつ。当初、安德天皇の御座船は本来は大陸にも渡ることができる唐船であった。しかし、知盛は安德天皇と三種の神器、そして二位ノ尼や建礼門院ら女院達を唐船でなく屋形船に乗せておく。唐船には雑兵を乗せ、能登守教経が指揮をとる。義経は直線的に唐船を狙い乗り込んでくるだろう。狙いは安德天皇と三種の神器であるが、待ちかまえているのは猛将として名高い教経である。そして義経が乗り込むや周囲から平氏の軍船が集結して逃がさないようにはさみうちにしようというのだ。そのためにわざと湾の後ろがないような地点に追いつめられるような形態をとろうとした。知盛の計画によれば完全な勝利の布陣はむしろ潮流が変わり源氏が攻勢に転じた時なのである。

この合戦全体を通じて義経は戦術的な指令も出さず完全に無策であった¹²³⁾。平氏軍は潮流によって包囲し攻めまくったが、戦局の有利さと裏腹に決定打にまでは到らなかったのには理由があった。後方に控えていた阿波民部太夫田内成良（田口重能ともいう）¹²⁴⁾ が率いる阿波水軍が戦闘に参加しないのだ。包囲体勢は横隊に近づくが、そのために後方部隊も前面にでざるをえなくなる。それは包囲網の中の穴となった。包囲体制が全体に薄い膜をはる形態になるのに対し、攻撃側は縦隊に近い形で一点に集中して突破作戦を行なうのだが壇ノ浦は潮流により突撃が遮られている。そのため源氏軍は後退しながら包囲されるという不利な状況に陥っているのだが、これを阿波海軍の穴が救っている¹²⁵⁾。

午後三時、潮流が変わる。潮流の逆転こそが知盛の罠が始動する瞬間であったが、成良が知盛の作戦を義経に知らせてしまう。義経その他源氏軍の兵士は唐船には見向きもせず貴種が乗っている真の核に向かって突進した。この状況から敗戦の覚悟を決めた知盛はじめとし、平氏一門は次々に入水していく。しかし、これほどの有利な状況にありながら義経は安德天皇と三種神器の一つを失ってしまったのである。

この平氏の滅亡によって後世にもたらされた影響としては、まずシーパワー

の意味が深く認識されることがなくなったことがあげられる。この後明治時代に至るまで海国の思想は希薄となり、明治以降すらも知盛が展開したような海軍戦略は復活しなかった。鎌倉政権は「武家政治の創始」と言われているが、この正当性はせいぜい半分である。ここで言う「武家政治」とは特殊東国的な支配であり、西国的武家支配とは異質なものである。しかし東国的支配のみを武家支配と考えることも戦略的思考を不在にしていた。敗北した平氏の手法を、敗北したがゆえに「貴族化」と置き換えることとなり戦略に対する認識を大きく欠如させていったからである。そのため「軋越」や「屋島強襲」といった「戦術」を「戦略」と誤解させたのみならず、そうした愚策を名作戦とみなして模範例とする最悪の事態を生み出し、後世にいくつもの悲劇を誕生させたのである。

おわりに

都落ちから平氏の滅亡に至る流れは、それに頼ることですべてを解決するような正確な史料が一つもないために、一般には大きな誤解が横行している。特に「愚策も勝利すれば賢策とみなされる」という結果論と、戦略と戦術の混同は目を覆いたくなるものがある。当該論文は、マハンの海軍戦略理論の助けを借りながら、可能な限り既存史料の中から法則を導き出そうと試みたものである。これにより、歴史の常識とされているものの誤解が解除され、正しい意味での戦略「概念」の確立に近づければと願うものである。

注

- 1) 金子常規『兵器と戦術の日本史』原書房、1982年。
- 2) 佐藤和夫『海と水軍の日本史 上巻』原書房、1995年。
- 3) 市古貞次校注『日本古典文学全集 平家物語 (2)』小学館、昭和51年、113頁。
- 4) マルキシズムの諸概念は今日時代遅れとなってしまったものが多いが、それでも歴史的分析においては有効なことがある。古代アジアの帝王が居住地を定めたことにより、本来都市が発達する要素のない場所に大都市ができあがるとい

う政治的な都市などは日本の様々な都市の盛衰を見るに際して重要であると思える。カール・マルクス『資本主義生産に先行する諸形態』大月書店、1963年、10～25頁。

- 5) 市古貞次校注『日本古典文学全集 平家物語 (1)』小学館、昭和51年、359頁。『源平盛衰記 上』有朋堂書店、昭和2年、550頁。
- 6) 軍記物は総じて兵力を誇張している。この時の兵数五万騎もはなはだ疑問の多い数字であるが、実数と風評との差について興味深い報告が当時出ていた。平氏が木曾義仲上洛を阻止せんとして出陣した時のことである。七月二十一日、資盛を大將軍として師盛、定俊、貞能らが宇治・田原方面に出かけたのであるが、吉田経房の『吉記』によればその勢三千騎とされていた。しかし九条兼実が数えたところによると千八十騎、兼実は風評や推定の類では七～八千騎とか一万騎とかいわれているのに実数が千ということは風聞がいかにあてにならないか察することができると述べている。九条兼実、市島謙吉編集『玉葉第二』東京活版株式会社、明治39年、608頁。この一件は、世間の風評だけでなく物語の誇張度合いも分かり興味深い。デュルブリックのように真に優れた歴史家ならばこうした兵数の是非、検証から分析を始めるのだろう。
- 7) 塚本哲三編『源平盛衰記 下』有朋堂書店、昭和2年、257頁。
- 8) 市古貞次校注『日本古典文学全集 平家物語 (2)』、148頁。
- 9) 『同上書』、158頁。
- 10) 塚本哲三編『前掲書』、266頁。
- 11) 『同上書』、278頁。
- 12) 市古貞次校注『日本古典文学全集 平家物語 (2)』、162頁。
- 13) 塚本哲三編『前掲書』、302頁。
- 14) かろうじて木曾義仲自らが山陽道に出陣した時に一万騎とされているだけである。市古貞次校注『日本古典文学全集平家物語 (2)』、150頁。
- 15) 塚本哲三編『前掲書』、314頁。
- 16) 市古貞次校注『日本古典文学全集 平家物語 (2)』、178頁。
- 17) 『平家物語』では福隆寺縄手、篠の迫、板倉が城で合戦をしたことが書かれているが、いずれも小規模なものにすぎない。市古貞次校注『日本古典文学全集平家物語 (2)』、161頁。
- 18) 市古貞次校注『日本古典文学全集 平家物語 (2)』、161頁。
- 19) 『同上書』、162頁。
- 20) キャサリン・コーリ、神川信彦／池田清訳『軍隊と革命の技術』岩波書店、1961年、149頁。Katharine Chorley, *Armies and the art of revolution*, Feber and Feber Limited, 1943.
- 21) 『同上書』、226頁。

- 22) 栃木孝惟／日下力校注／益田宗、久保田淳校注『新日本古典文学大系 43 保元物語 平治物語 承久記』岩波書店、1992 年、167 頁。
- 23) 生方敏郎『前掲書』古人今人社、昭和 14 年、429 頁。
- 24) 平時忠の発言などから強くうかがえる。市古貞次校注『日本古典文学全集 平家物語 (2)』、136 頁。
- 25) もともと緒方氏は平重盛と主従関係にあった。当主である緒方惟栄は亡き重盛の家人であり、清盛の日宋貿易の恩恵を受けたが、清盛直属の家臣であった宇佐氏との抗争によって反平家色を強めていた。
- 26) 九条兼実とは周防に到着したという風聞を載せている。九条兼実、市島謙吉編集『玉葉 第二』東京活版株式会社、明治 39 年、634 頁。
- 27) アルフレッド・セイヤ・マハン、海軍軍司令部（尾崎主悦）訳『海軍戦略』原書房、昭和 55 年、172 頁。Alfred Thayer Mahan, *Naval Strategy: Compared and Constructed with the Principles of Military Operation on Land*, 1911.
- 28) 市古貞次校注『日本古典文学全集 平家物語 (2)』、140 頁。なお『源平盛衰記』では百三十隻とある。塚本哲三編『前掲書』、244 頁。
- 29) 屋島に到着した平氏軍に阿波の豪族である田口民部大夫成良が加わった。成良は阿波の要所である桜間城に拠点を構えていたために徳島平野が勢力圏となり、その結果淡路島を制圧すれば「鳴門の浦」における海峡支配が可能になってきた。
- 30) 屋島にただで山陽道八ヶ国南海道六ヶ国、あわせて十四ヶ国が平氏の支配圏に入ったと記述されている。市古貞次校注『日本古典文学全集 平家物語 (2)』、148 頁。
- 31) 『源平盛衰記』によれば、木曾義仲との水島合戦段階では既に平家が城を構えていたようである。塚本哲三編『前掲書』、256 頁。
- 32) 「常時在備前国児島船百余艘云々」とある。九条兼実、市島謙吉編集『玉葉 第二』、616 頁。
- 33) 塚本哲三編『前掲書』、251 頁。
- 34) アルフレッド・セイヤ・マハン、北村謙一訳『海上権史論』原書房、1982 年、35 頁。Alfred T. Mahan, *The Influence of Sea Power upon History, 1660-1783*, Dover Publications, 1987.
- 35) 『同上書』、36 頁。
- 36) 毛沢東、藤田敬一／吉田富雄訳『遊撃戦論』中央公論社、2001 年、41 頁。
- 37) アルフレッド・セイヤ・マハン『海軍戦略』、27 頁。
- 38) 塚本哲三編『前掲書』、217 頁。
- 39) 『同上書』、217 頁。
- 40) 『同上書』、357 頁。同 359 頁。

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

- 41) 『同上書』, 546 頁。九条兼実『玉葉 第三』, 70 頁。
- 42) 『同上書』, 256 頁。
- 43) 『同上書』, 546 頁。同 551 頁。九条兼実『玉葉 第二』, 616 頁。
- 44) 『同上書』, 358 頁。
- 45) 『同上書』, 256 頁。同 559 頁。
- 46) 『同上書』, 553 頁。
- 47) 『同上書』, 553 頁。同 559 頁。
- 48) アルフレッド・セイヤ・マハン, 海軍軍司令部（尾崎主悦）訳『海軍戦略』原書房, 昭和 55 年, 174 頁。
- 49) 塚本哲三編『前掲書』, 553 頁。同 559 頁。
- 50) アルフレッド・セイヤ・マハン『海軍戦略』, 112 頁。
- 51) 『同上書』, 179 頁。
- 52) 市古貞次校注『日本古典文学全集 平家物語 (2)』, 148 頁。対する源氏海軍は五百隻であった。『源平盛衰記』では平氏海軍三百隻, 源氏海軍千隻とある。塚本哲三編『前掲書』, 256 頁。
- 53) 『平家物語』と『源平盛衰記』では若干描写が異なっている。『平家物語』では屋島攻撃のために水島に集結した源氏軍との海戦が牒状を運ぶ舟を合図に始まったとされている。『源平盛衰記』では海戦だけでなく水島城の攻防も加わっている。
- 54) 市古貞次校注『日本古典文学全集 平家物語 (2)』, 157～159 頁。塚本哲三編『前掲書』, 267～269 頁。水軍と連動すると平氏は戦術的に優れた戦いを行う。これは「墨俣合戦」でも例証済みである。
- 55) 九条兼実は備前と播磨の合戦結果を聞き「平氏兵強」と述べている。九条兼実『玉葉 第二』, 642 頁。
- 56) 塚本哲三編『前掲書』, 245 頁。
- 57) 市古貞次校注『日本古典文学全集 平家物語 (2)』, 205～210 頁。
- 58) 塚本哲三編『前掲書』, 昭和 2 年, 357～359 頁。
- 59) 能登守教経の瀬戸内海での活躍は従来は軽んじられていた。最初に「六ヶ度合戦」に注目したのは佐藤和夫氏であった。佐藤和夫『前掲書』原書房, 1995 年.217～220 頁。ただし佐藤氏は制海権の拡大としてではなく, 制海権が確保された中での反乱者の追討という形で論を展開している。平氏が福原に陣取った後であることを考えるとこれも妥当性を有しているが, 本論文では戦闘地域がすべて海軍戦略上の要所であるため制海権確保段階に起きたものとみなす方がより妥当と推論した。なお『玉葉』が一ノ谷合戦後に述べている六ヶ度合戦との関連は, 詳細が載せられていないため不明である（九条兼実『玉葉 第三』, 32 頁）。

- 60) 九条兼実『玉葉 第二』, 665 頁。九条兼実『玉葉 第三』, 2～3 頁。
- 61) 九条兼実『玉葉 第三』, 9 頁。
- 62) 貴志正造訳『吾妻鑑第一巻』新人物往来社, 1989 年, 146 頁。
- 63) リデル・ハート, 森沢亀鶴訳『戦略論（上下）』原書房, 1973 年, 185 頁。
Basil Liddell Hart, *Strategy*, Meridin, 1991, pp.168-169. リデル・ハートはこの書物の中で、直接的な戦闘により相手を打倒するよりも、相手に心理的敗北感を与えることが効果的とみなし「間接的アプローチ」を提唱した。なおリデル・ハートは奇襲も間接的アプローチになりうるとしているが、単純な奇襲と間接的アプローチになりうる奇襲とを区別もしている。
- 64) 塚本哲三編『前掲書』, 448 頁。
- 65) カール・フォン・クラウゼヴィッツ, 篠田英雄訳『戦争論上』岩波書店 1996 年, 262 ページ。Carl von Clausewitz, *Vom Kriege*, Philipp Reclam jun. GmbH & Co., Stuttgart, 1980. なお『尉遼子』には勝利の分類の中で「曲げて勝つ」という記述があるが（北村佳逸訳『兵法尉遼子』立命館出版部, 昭和十八年, 112 頁）, これは「理由なく勝つ」の意味であるからやはり「愚策が幸運な勝利をひろった」ことの表現ととれる。
- 66) 後漢末の 208 年（建安十三年）, 魏の曹操率いる大軍に対して、呉の提督・周瑜と蜀の軍師・諸葛孔明が挑んだ戦い。公称百万人とも言う兵士を乗せた舟に対し、偽りの降伏をした呉将の黄蓋が「火攻めの計」を実施して勝利した。他にも停泊中の艦隊を襲う戦いはスパルタのリサンドル時代以来数多く見られている。英国王エドワード三世の指揮したスロイスの海戦も港内に向かって攻勢をかけたものであった。ネルソン提督が指揮した海戦においても、ナイルの海戦とコペンハーゲンの海戦はともに沿岸地帯に停泊した艦隊を奇襲したものである。無敵艦隊アルマダもグラフェリンゲン沖に停泊中に奇襲をうけている。
- 67) 敵の状態を考慮すべきことは『孫子』では「彼を知り己を知れば百戦して危うからず」とあるが、『六韜』では「兵徴」（北村佳逸訳『兵法六韜三略』立命館出版部, 昭和十八年, 153～157 頁）, 『三略』では「必ず先ず敵状を察し、其の倉庫を視、其の糧食を図り、其の強弱をトし」（北村佳逸訳『兵法六韜三略』立命館出版部, 昭和十八年, 325 頁）, 『尉遼子』では「敵を権り」（北村佳逸訳『兵法尉遼子』立命館出版部, 昭和十八年, 87 頁）「五つの者は、先ず敵を料りて後に動く」（北村佳逸訳『兵法尉遼子』立命館出版部, 昭和十八年, 87 頁）, 『司馬法』では「およそ戦いは、衆寡以てその変を觀」と表現方法は様々ながらも、中国の兵法書のほとんどが重視している点である。『呉子』も「料敵」で進撃や撤退の条件を敵情に応じて述べている。北村佳逸訳『兵法呉子』立命館出版部, 昭和十八年, 51～76 頁。
- 68) 「一ノ谷合戦」よりわずか二ヶ月半ほど後の『吾妻鑑』の四月二十八日には

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

「平氏西海に在るの由風聞す」と記されている。貴志正造訳『吾妻鑑第一巻』, 161 頁。

- 69) 九条兼実『玉葉 第三』, 13 頁。なおその兵力は三千人とされている。
- 70) 塚本哲三編『前掲書』, 553 頁。
- 71) アルフレッド・セイヤ・マハン『海軍戦略』, 160 頁。
- 72) 『玉葉』元暦元年 8 月 1 日に書かれている。九条兼実『玉葉 第三』, 32 頁。
- 73) 貴志正造訳『前掲書』新人物往来社, 1989 年, 154 頁。同 162 頁。『源平盛衰記』には八月に平信兼が伊勢・瀧野に籠城し, これを義経が攻め落としたことになっている。塚本哲三編『前掲書』, 544 頁。しかし『吾妻鑑』では義経が伊賀の戦いで平氏方として活躍した平信兼の息子達を招いて殺すという記述となっている。貴志正造訳『前掲書』, 171 頁。
- 74) 貴志正造訳『前掲書』, 168 頁。同 169 頁。伊賀における平氏側の中心的な武士は平田貞継ら四人で伊勢・伊賀のみならず近江まで巻き込む大規模な戦いになったとされている。塚本哲三編『前掲書』, 553 ~ 540 頁。
- 75) アルフレッド・セイヤ・マハン『海軍戦略』, 309 頁。
- 76) 貴志正造訳『前掲書』, 149 頁。
- 77) 九条兼実『玉葉 第三』, 23 頁。
- 78) アルフレッド・セイヤ・マハン『海軍戦略』, 158 頁。
- 79) 塚本哲三編『前掲書』, 540 頁。
- 80) 九条兼実『玉葉 第三』, 24 頁。
- 81) 『同上書』, 32 頁。
- 82) 『源平盛衰記』でも九州が平氏の勢力圏となっていることが描かれている。塚本哲三編『前掲書』, 538 頁。
- 83) 貴志正造訳『前掲書』, 173 頁。
- 84) 『同上書』, 170 頁。
- 85) 塚本哲三編『前掲書』, 545 頁。しかし千艘の舟というのはこの後起こる「児島合戦」の内容と矛盾するようである。
- 86) 知盛の攪乱によって兵糧の徴収もままならず, わざわざ伊豆から兵船三十二隻で兵糧を運んだことが『吾妻鑑』に出ている。貴志正造訳『前掲書』, 197 頁。
- 87) カール・フォン・クラウゼヴィッツ, 篠田英雄訳『戦争論 上』岩波書店 1996 年, 327 ページ。Carl von Clausewitz, *Vom Kriege*, Philipp Reclam jun. GmbH & Co., Stuttgart, 1980.
- 88) 貴志正造訳『前掲書』, 174 頁。
- 89) 九条兼実『玉葉 第三』, 40 頁。
- 90) アルフレッド・セイヤ・マハン『海軍戦略』, 161 頁。
- 91) 『吾妻鑑』では十二月七日に五百騎で籠もったとされている。貴志正造訳『前掲

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

書』, 181 頁。『源平盛衰記』の記述ではこの段階では再び山陽道は平氏の勢力圏に入ったことになっている。また範頼は室泊に留まっていたと描かれている。塚本哲三編『前掲書』, 546 頁。

- 92) 『同上書』, 181 頁。
- 93) 『同上書』, 551 頁。
- 94) アルフレッド・セイヤ・マハン『海軍戦略』, 160 頁。
- 95) 平氏軍はこの後も二百隻で攻め寄せて、「船軍の事西国の賊徒は自在を得たり、東国の官兵は寸歩を失て、実平毎度に被敗けり」とあり、土肥実平が敗退していく様子が描かれている。塚本哲三編『前掲書』, 566 頁。
- 96) カール・フォン・クラウゼヴィッツ『前掲書』, 324 ページ。
- 97) アルフレッド・セイヤ・マハン『海軍戦略』, 314 頁。
- 98) 貴志正造訳『前掲書』, 183 頁。
- 99) 『同上書』, 187 頁。
- 100) 『同上書』, 187 頁。
- 101) 『同上書』, 190 頁。
- 102) マハンによっても「海軍は陸軍よりも優秀なる運動力を有するが故に、遠地を急襲するには陸路よりも海路に依るを容易なりと雖も、斯かる攻撃は敵の心臓に刺すに非ずして、僅かに手足を傷くるに過ぎざるが故に、敵の本国若は艦隊に対する勝利率其の効果決定的にならず」と述べられている。アルフレッド・セイヤ・マハン『海軍戦略』, 232 頁。決定的打撃は陸上による決戦か、あるいは政治的影響力による「戦わずして敵を屈する」かのいずれかになったはずであろう。
- 103) カール・フォン・クラウゼヴィッツ『前掲書』, 252 ページ。
- 104) 『同上書』, 289 ページ。
- 105) 貴志正造訳『前掲書』, 187 頁。一隻に十人が載るとすれば兵力は八百二十人程度になっていたことになる。なお『源平盛衰記』では五百隻となっている。塚本哲三編『前掲書』, 554 頁。
- 106) 当時、知盛傘下にあった海軍の総数は不明であるが、『玉葉』の記述では五～六百隻の舟が淡路にまで出向いているが、それは屋島の本営を守っている海軍以外の遊撃軍の数にすぎない（九条兼実『玉葉 第三』, 70 頁）。そしてこの段階よりも大幅に減少した壇ノ浦合戦段階でさえ五百隻の舟があったことを考えると数百隻近い数はあったものと推測される。なお『吾妻鑑』によれば彦島において後方遮断に従事していたのは九州の兵だったようである。貴志正造訳『前掲書』, 191 頁。
- 107) 九条兼実『玉葉 第三』, 65 頁。
- 108) アルフレッド・セイヤ・マハン『海軍戦略』, 234 頁。

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

- 109) 『同上書』, 234 頁。
- 110) マハンは海上輸送の場合の補給の問題を指摘している。『同上書』, 275～276 頁。このことは地理的条件によっては陸上でも該当するものであろう。
- 111) 『平家物語』によれば、当初は源氏軍百五十騎に対して平氏軍千騎、志度浦合戦段階では源氏軍は三百騎となっているが、田内教能が直後に三千騎を率いて屋島に向かっているため平氏軍は四千騎を越えるものとなるはずであった。『同上書』, 379 頁。
- 112) 源氏軍はわずかに八十騎であった。貴志正造訳『前掲書』, 193 頁。これは『平家物語』でも同数となっている。市古貞次校注『前掲書』, 378 頁。なお平氏軍は千騎とある。
- 113) 佐藤和夫氏は梶原海軍到着を恐れたのではと推測されている。佐藤和夫『前掲書』, 260 頁。
- 114) 「屋島合戦」に破れて四国勢が離反した後でさえも『玉葉』によれば、三月十六日時点で安芸・厳島に百隻で到着したとされている。九条兼実『玉葉 第三』, 70 頁。一隻に十人が乗るとしても千人近い。義経が百五十騎（一隻十人ならば五十人ほどであろう）としても平氏軍が圧倒的に大軍ということになる。
- 115) 塚本哲三編『前掲書』, 601 頁。
- 116) 杉之尾宜生（編著）『戦略論大系① 孫子』芙蓉書房出版, 2001 年, 47 頁。
- 117) 『同上書』, 65 頁。
- 118) 貴志正造訳『前掲書』, 200 頁。
- 119) 市古貞次校注『前掲書』, 383 頁。
- 120) 九条兼実『玉葉 第三』, 72 頁。
- 121) 一般に潮流によって源氏軍に対して突撃を加えたようなイメージで描かれることが多いが、当時の海戦は「矢合戦」であり、突撃することはむしろ不利であった。『平家物語』の記述では、山鹿党が交互に射手を変えて源氏軍に攻撃を加えたとそれているから、有利な包囲陣形を引くために潮流を利用したとすべきである。
- 122) 大正八年（1919 年）に黒坂勝美氏が発表した説によると関門海峡の潮流は、未明に西に流れていた潮流が、午前八時三十分には東へと向きを変え、午前十一時頃には八ノットにもなるが、午後三時頃に再び流れは西へ向かい、午後五時に最高潮に達するとしているのだが、異論も出されている。
- 123) わずかに船頭・舵取りという非戦闘員を射殺を命じただけである。これは明白な違反行為であり、海上での非戦闘員殺傷は平氏軍が同様の反撃を行なえば収集がつかない泥沼にはまりこむことになったであろう。義経は彦島でも無関係な民間人殺戮を行っている。
- 124) 成良の子の教良が屋島合戦で平氏を裏切ったため親子が敵味方に別れている。

寿永二年七月二十五日以降の平氏のシーパワーとしての戦略展開（海上）

知盛は成良の挙動より裏切りを察知していたため裏切りが本格化する未然に切ることを考えた。ところが宗盛が反対した。成良は宗盛の家人であり、しかもこれまでに随分と平氏のために尽くしてきた。かくたる裏切りの証拠もないのに切ることはできないということによる。

- 125) ナポレオンは戦闘では結節点を狙えと述べているが、阿波水軍はいつてみれば結節点になっていた。